

落語会



神奈川県病院では、入院中の患者様にも四季折々の風情を感じて楽しんでいただきたいという思いから、定期的に院内行事をおこなっています。

10月は、仲見世亭わ一吉さんをお招きして落語会を開催しました。

落語会を開くのは初めての試みでしたが、全2口演ともに会場いっぱい患者様やご家族の方が集まってくださり、大盛況となりました。

わ一吉さんの巧みな話術と豊かな表情、仕草につられて、会場は常に「クスクス」と笑い声であふれ、自然と皆さん笑顔になっていたように思います。

仲見世亭わ一吉さん、会場にお越しくくださった皆さま、ありがとうございました。

仲見世亭わ一吉さん

本業は病院に勤める理学療法士さん。
趣味で嗜んでいる落語を極め、病院や施設などで落語を披露してくださっています。

演目「お菊の皿」

この日の演目は「お菊の皿」。古典的な怪談である皿屋敷を下敷きとしたお話で、落語をよく知らない人でも一度は耳にしたことがあるであろう、有名な演目の一つです。

お皿を恨めしそうに数えるお菊と少し間抜けな村人のユーモアなやりとりを、面白おかしく語っていただきました。



病棟のデールームに50人近く患者様やご家族の方が集まって、楽しんでいってくれました。



落語とは？

落語の始まりは、室町時代末期から安土桃山時代にかけて、戦国大名のそばに仕え、話の相手をしたり、世情を伝えたりする「御伽衆（おとぎしゅう）」と呼ばれる人たちでした。

その中の一人、安楽庵策伝（あんらくあんさくでん）という浄土宗の僧侶は、豊臣秀吉の前で滑稽なオチのつく「噺（うた）」を披露してたいへん喜ばれました。江戸時代に入ると有料で噺を聞かせる人物が登場し、こうして、「寄席」が誕生しました。

歌舞伎など、ほかの伝統芸能と違い、落語は身振りと手振りのみで噺を進め、一人何役をも演じます。衣装や舞台装置などを極力使わず、演者の技巧と聴き手の想像力で噺の世界が広がっていく、とてもシンプルで奥深い芸能です。

